

柳沢牧跡の開墾は柳沢保申公との約束か -開墾家に変身した西村翁の合理的慧眼を追う-

高橋 誠一

はじめに

明治政府は2(1869)年5月、授産事業に江戸幕府の馬牧地だった千葉野(旧来の小金牧・佐倉牧)を対象に、大々的に開墾政策を打ち出した。失業した武士たちへの救済策である。

授産事業ながら、資金不足な明治新政府は僅か20万両を用意しただけで、あとは江戸の豪商たちに開墾会社を組織(出資者を社員と呼ぶ)させ、管理・運営を任せた。財閥三井組を代表する三井八郎右衛門はじめ、西村七右衛門ら230人が出資に応じたが、開墾経営を実質37人が取り仕切った。

とりわけ深川東永代町と横浜に本店を構え、8カ所に支店営業所を持つ西村七右衛門(4年元旦から郡司を名乗る)は、開墾会社が創業3年後の5年5月、解散を打ち出しても「個人的に継続する」と公言。身は深川にありながら、代理人を通じて柳沢牧跡開墾に傾注し、結果として千葉県の農業基盤確立に大きく貢献した。

なぜ、「個人的に継続する」と公言したか。これは慶応4(1868)年中、次女ひて(通称秀)が塩澤七兵衛と結婚した時、柳沢家6代・保申公からお祝いに“打ち掛け一式”を貰い受けた事実がある。この1件で、私は「柳沢牧跡の開墾は、保申公との約束であり成功させねばならなかった」と考えている。

尤も、約束を証明する文書の類いは柳沢家・西村家双方に残されてはいない。

詳しくは本論で述べていく。

1、多面的な豪商・西村七右衛門

豪商としての西村を略譜にまとめる。

和 暦	西 暦	事 績
文化11	1814	9月23日(新暦11月4日)現さいたま市見沼区東門前生まれ。代々農家・名主。長嶋八左衛門・志なの第4子、次男。
天保 3	1832	江戸小舟町のご用達油・為替商丸屋(西村三郎兵衛)に奉公。
天保12	1841	西村三郎兵衛に見込まれ長女八重と結婚。
天保13	1842	霊岸島に分家独立。七右衛門と改名(本家丸屋は後に廃業)。3年後火災。翌年、再興。
安政 2	1855	大地震。商品倉庫6棟倒壊。被害甚大。
安政 6	1859	鍋島様横浜貿易所(肥前屋の前名)を共同経営。 横浜開港に伴い港街の道路・溝渠は汚れ放題。町年寄から「何か妙案はないか」と問われた西村は、「売上1ドルにつき3厘ずつ納め

		改修費に当てればよい」と即座に回答。即刻採用され、1年後は「1厘5毛に半減」共有財産の基礎となった。 安房御宿に干鰯主体の出張所を開設。
文久 3	1863	横浜大火。肥前屋類焼。再興の店舗を「大肥前屋」と改称。共同経営の高島嘉右衛門は入牢中・花菱屋多一郎は病氣引退で、西村単独経営となる。
慶応 2	1866	横浜、再び大火。求めに応じ土木工事請負を加える。
慶応 4	1868	(前述)次女ひて・塩澤七兵衛と結婚。 柳沢家から祝い品“打ち掛け一式”拝受。
明治 2	1869	政府／開墾役所設置。西村は商法司取締拝命。 開墾会社取締、東京通商為替会社頭取、横浜通商為替会社頭取に各就任。
明治 3	1870	柳沢牧跡(現八街市)を管轄。 水運業を始め、東京～中田間に川蒸気船出願。 閏10月11日以降、旧小間子牧跡の「御成街道」を拡幅工事。いつまで続けたか不詳だが、三井文庫所蔵の「請地分埜帳」[6年12月新調 総州印旛郡旧小間子牧小作地割 絵図面]に、工事後の「道幅12間3尺」「総延長 1123間4尺5寸」と明記されている。
明治 4	1871	本格的に水運業に乗り出す。 北海道開拓使に任命(非常勤)。
明治 5	1872	東京営繕会議所頭取に就任。 5月、開墾会社が解散を打ち出す。西村は「個人で継続する」と公言。 三井組から小間子牧取締役の月給支払い記録が残る。 ・西 村月給 12両2分ツゝ ・大久保月給 6両ツゝ ・福 田月給 6両ツゝ
明治 6	1873	4月15日、旧柳沢牧の一画(現夕日丘区)に、開墾地初の神社・妙見神社が建立された。鳥居の貫下(ぬきした)が僅か145.5 $\frac{1}{2}$ 。頭を下げないとくぐり抜けられない。 妙見神社の大本・千葉神社の山本宮司に聞いた。 「開墾地初だけに、西村様に遠慮されたのではありませんか」 11月23日、旧小間子牧の一画に、仮宮(かりみや／八街神社の前身)を設け、西村の故郷・氷川神社から分霊。西村は開墾地入りした当初から、“氷川様”を崇拝している。

明治 7	1874	2月25日、旧開墾会社持ちの旧小間子牧を、三井組が2万円で落札。 三井組の番頭・三野村利左衛門(19～25歳まで西村店に努めた)から、西村は「2万円以上が斡旋してくれたら、それ以上の分は斡旋料として支払う」とする文書が残る。
明治 8	1875	3月31日、鍋島藩の金庫番・深川亮蔵が2万円で三井組と買い取り契約。西村に斡旋料は発生しなかった。 旧開墾会社の清算総会は5月と8月に開かれ、紛糾。 西村は6月、谷中墓園に墓地を購入。
明治 9	1876	3月、大肥前屋が営業改革に乗り出す。三井組からの借り入れ金は元利合計、31,584円に及んだ。 この年、旧小間子牧の一画(滝台／下村宅「ここは大隈事務所と言われた」)が大隈重信名義に変更。
明治10	1877	12月30日、旧開墾会社が「解社」。解散以来、5年余でようやく各社員への配分が決まる。
明治11	1878	千葉県知事が、三井組や西村らに「旧開墾地の買い取り」を要請。
明治12	1879	11月2日、旧小間子牧跡の八街神社・新宮(にいみや)竣工。費用の全額を西村が負担。
明治13	1880	6月15日、深川区議会議員に当選(定員3人)
明治14	1881	3月、妻八重ら八街に転居。 7月21日、旧小間子牧跡の150町歩を鍋島家から譲渡される。 11月11日、横浜のひて夫婦も転居。居宅一部は西村本家に移築。 応接間として現在も活用。
明治15	1882	2月3日、西村が八街に籍を移す。 文書が未整理のころは「西村は5年以来、開墾地にひっこんだ」として、そのまま人名辞典は引用。「それは違う」と各版元に修正を申し入れしている。 西村が八街に越して以降、大隈重信(横浜の「大肥前屋」時代の食客)が何度か訪ねて来ている。
明治18	1885	3月11日付、柴崎守三よりの手紙。「東(永代)町売却の件、1,000円ではとても売却が難しい」
明治22	1889	御宿支店を閉鎖。
明治24	1891	4月16日、養嗣子金太郎(ひて夫婦の長男)が千秋と改名(西村本家2代を名乗る) 5月24日、妻八重没。成田山不動院に分院を勧請。
明治28	1895	1月31日、西村没。2月6日葬儀。

2、授産事業対象地としての千葉野

冒頭、触れたように千葉野は、江戸幕府の馬牧地（ばぼくち）であり、小金牧と佐倉牧に属し、次のような牧が所属した。それぞれに開墾地が開かれた。

小 金 牧		佐 倉 牧	
中 野 牧	初 富(★)	印 西 牧	十余一
上 野 牧	豊四季・五香・六実	内 野 牧	七 栄
下 野 牧	二 和・三 咲	柳 澤 牧	八街一～六(三に★)
高 田 台 牧	十余二	高 野 牧	十 倉
		矢 作 牧	十余三／一～三

(注)

①開墾地名の次の一～六、一～三は一番～六番会社、一番～三番会社の意。

②★印は、開墾局仮役所の設置場所。そこには教責場も設置された。

開墾局仮役所に常勤職員はいない。八街の三番会社(社員／西村)の場合、仮役所職員の中継基地に利用され、管内への連絡文書は同会社から回覧された。また、事務所が完成した3年7月以降、職員の宿泊に利用されている。

3、柳沢牧跡(八街の開墾会社)の社員たち

会社(略印)	社 員 名	住 所	職 業
一番(略印ろ)	野 口 庄三郎 元 木 清兵衛 京 屋 弥兵衛 釜 屋 佐八郎	深川冬木町 深川佐賀町 室町貳丁目 桶町壺丁目	材木問屋／野口屋 藍玉問屋／池西屋 定 飛 脚／村 井 質 渡 世／善 野
二番(略印は)	亀 屋 源兵衛 大黒屋 八兵衛 大黒屋 喜 助 竹 屋清左衛門 谷口屋 庄 蔵	富 沢 町 富 沢 町 富 沢 町 佐 内 町 通町壺丁目	太 物／大 久 保 舶来物渡世／饗庭 質 渡 世／伊 東 紙たばこ／村 田 草煙草入袋物／谷口
三番(略印に)	西 村 七右衛門	深川東永代町	米油問屋／丸 屋
四番(略印ほ)	大鐘品吉(永蔵と改名) 坂 江吉右衛門 会津屋平右衛門	万 町 通 油 町 江戸橋錦町	麻苧問屋／遠 州 屋 木綿呉服問屋／大黒屋 鉄物問屋／森 岡
五番(略印い)	松 本 喜三郎 脇 坂助右衛門 神 田 太 助 山 口 武兵衛 松 田喜右衛門	堀 留 町 田 処 町 小 舟 町 田 処 町 伊 勢 町	砂 糖／大 阪 屋 蠟 燭／駿 河 屋 砂 糖／大 阪 屋 砂 糖／越 後 屋 蠟 燭／大 津 屋
六番(略印ろ)	林 九兵衛	室町貳丁目	小間物問屋／木 屋

(注)

①三番会社に残る「御用先日記」の明治3年4月19日の条に、略印の「い～ほ」を表示。一つずつ

ずらして各開墾会社を当て、社員名前(代人を含む)が書き込まれている。尤も、同日付では一番会社に6人が記載され、四番会社は空白である。

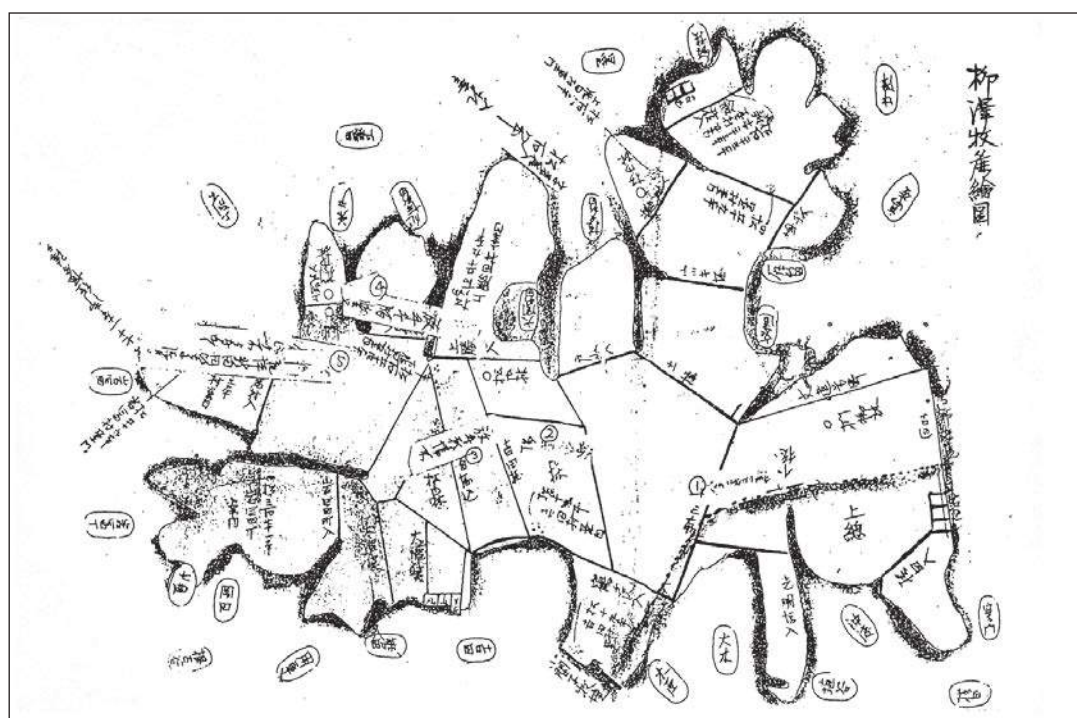
②当初から予定されていたものか同年7月、林 九兵衛が到着。先に一番会社に配分した内から林に分与され、一番から3人が四番に所属替えとなり、本来の姿が整った。尤も、林は翌年2月、西村に全面委譲して東京に帰った。該地は「西村・林」に因み、「西林」として地名は今も存続している。

③“西林”のすべては、西村の次女ひて夫婦の所有となった。

4、柳沢牧の由来に触れる

八街の開墾地すべては「柳沢牧跡」である。

公益財団法人三井文庫に残る「柳澤牧亀絵図」を次に掲げる。



従来、柳沢牧そのものの由来がはっきりしなかった。地元『八街町史』はじめ『松戸市史』など、確たる資料を見つけ出せないまま編んでいる。

「柳澤牧龜絵圖」のコピー確保以来、筆者が長年“根源探し”につとめてきたころ、奈良県大和郡山市の公益財団法人郡山城史跡・柳沢文庫保存会を知った。学芸員の佐竹朋子さんからの資料を得て長年の謎が解明できた。

以下、同保存会資料などから、関連を列記する。

①上総国一之袋(今の東金市)に、領地をもっていた柳沢安忠に同地の佐瀬家からきの女が奉公にあがり、吉保を産む。その頃、安忠はまだ160石の小格。

②延宝3(1675)年7月12日、吉保が相続。

③天和3(1683)年1月11日、上総国山辺郡・武射郡の内、200石を加増された。「柳澤牧龜絵圖」の右下部分である。

この時の加増地は今なお、八街市八街に字柳沢(現八街市立幼稚園周辺)や、山武市横田にも字柳沢が残る。柳沢牧の範囲を想定するに不都合はない。

吉保はその後、元禄7(1694)年1月、武蔵国川越城(7万石)に転封。さらに宝永元(1704)年、徳川家宣の旧領15万石を与えられ翌年、甲斐国 山梨、八代、巨摩の3郡を加増。22万8千石の甲府藩初代藩主となる。

④宝永6(1709)年6月、吉里に相続(甲府藩2代藩主、郡山藩初代藩主)以降、信鴻・保光・保泰・保興と続き、6代保申公で明治維新を迎える。

⑤“柳沢牧”と正式に表記したのは誰か。柳沢吉保のお抱え儒学者・細井広沢(1658～1735)と筆者は推測している。吉保没後8年目に、幕府は「享保の経済改革」を打ち出した。関東代官だった小宮山空之進(かつて細井の塾生)から細井は「経済改革のため、実測図を早急に仕上げてほしい」と頼まれた。仕上げた絵図面の中に“柳沢牧・小間子牧”があった。

原図は、東京世田谷区の致航山満願寺に保存されている。同寺境内には、「史蹟細井廣澤の墓」も残る。

⑥公益財団法人三井文庫の「柳澤牧龜絵圖」は、見た通りの龜絵図である。作成年次は記載されてないが、明治7年の項に登載されている。開墾事業の資料として作成されたものか。概形はおおよそ三角。地名三角も確認できる。

今の地名「実住」は、「三角」を美称したもの。いつから「実住表記が始まったか」は、同文庫所蔵文書に「明治10年12月5日 東実住」が見える。

⑦字三角一帯は「略印は」の領域。西村の三番会社は元々、「略印に」の配分を受けた。が、開墾会社事務所を建設時、予定地が「東金道路にかかるから」の指摘を受け、2度も変更を重ね今の位置に建設した経緯がある(「御用先日記」3年3月3日の条に記述)。

5、柳沢保申公と西村の接点は何か

この疑問に応える素材はない。公益財団法人郡山城史跡・柳沢文庫保存会の職員によれば、「保申公は記録を残さなかった」と言う。西村家文書を総点検すれば何かは出てほしいが、開墾記録など実際に留めたものが多く、開墾以前のものは出てこない可能性が高い。

保申公は、弘化3(1846)年3月26日、柳沢別邸(現六義園)で産まれた。同公から“打ち掛け一

式”をもらった、西村の次女ひては同年7月10日に東永代町で産まれている。ここで併記することに意味があるか、と思うと迷いの方が大きい。親の西村(1814～95)は次女ひてが産まれた時、32歳。西村と保申公との年の差は32歳。娘と同年という親近感が増したに違いない。

保申公は、千葉県に先代の名をとどめた“柳沢牧”の存在は、知らなかったのではないか。江戸の豪商西村は仕事柄、幅広く情報をつかんでいたに違いない。開墾地が柳沢牧と察知した時、行動を先んじたのは大かた西村であろう。

「今度、そなたゆかりの土地を開墾することとなった。」

「えっ、何で千葉に“柳沢牧”があるのか。お主が管轄されるとは嬉しい限りだ。是非、成功してほしい。」

こんな会話が交わされたと推測している。

次女ひては慶応4(1868)年、塩沢家から七兵衛を養子に迎え、挙式時に保申公からお祝いに戴いたのが“打ち掛け一式”である。現物は、ひての3男源之助の末裔(現千葉みなと病院経営／千葉市稲毛区住)に残る。現物の存在を娘たちに語った本人は今、104歳。記憶が飛んで、何も聞けない状況にある。

ひて関連を列記する。

①明治2(1869)年4月、長男金太郎(後、西村本家に養嗣子入り。2代を継ぐ)が産まれる。

②同年5月、政府が主導し授産事業に乗り出す。が、主体は西村ら豪商たちに開墾会社を組織させ、運営・管理を一任した。

③5(1872)年5月、開墾会社は打ち続く天災と、農業に不慣れな旧武士たちの気力不足も影響し、管轄する社員の脱落が続出。

④西村はこうした現況を見つめ、「断固、開墾を継続する。個人的にも成功させたい。農業・食料生産は国家事業だ」と、持ち前の信念にこだわった。底には柳沢保申公との約束があったに違いないと筆者は考えている。

6、幕末の相場師・西村は並びなき名将か

豪商としての西村は高く評価されながら一時期、相場師としても名をなしたと言われる。ここでは、その一面に触れる。

読売新聞は明治36(1903)年6月17～19日、「相場師社会-大手の売買降り・相場師の人物論」に西村を扱っている。

冒頭「後年郡司と改名して下総の八街へ引退した。(中略)功名を争はなかった故、餘り名前ハ売れて居らぬが、彼れの様な大胆にして且、駆け引きに富んでいた者ハ古今に其類を見ない。人あり。若し、強ひて相場史中より、大傑物を求めとせば劈頭、先ず彼を数えるであろう。」とベタほめである。

末文は「下総の八街の原(縦横4里餘)を開墾する者の無かったのを幸ひ、之を一手に引き受けて這ったのが成功して、大資産家になったのだ。」

同紙の概要を、令和2(2020)年5月2日版の日本経済新聞・電子版は次のように紹介している。

「明治初期の大相場師としては大阪の阿部彦太郎、桑名の諸戸清六、天下の糸平(田中平

八)らが有名だが、西村七右衛門(のち郡司と改名)のことはあまり知られていない。功名を争わなかったため知名度は低いが、大胆にして駆け引きに富んでいる点では、西村の右に出るものはいないといった見方もされている。」

「(中略)後年、築地の商社に入って肝煎りを務めていた間も評判が良かったのだ(中略)西村は、長く相場にかかわっていると、ついには元も子もすって浮世の秋をかこつようになるのが最後であるゆえ、のちの世に残る事業経営を始める必要があると考え、千葉の八街の原野4里4方を一手に開墾することとなる。これがズバリ的中し、大資産家としての名声を高める。」

同版は、相場師・西村の信条を次のように紹介している。

- 1、見込みが外れても、2年でも3年でも辛抱する。
- 2、まだるっこい実業をやめ、のるかそるか、相場道に専念する。
- 3、相場を張り続けていると資産をすってしまうので、事業に投資する。

私はこれを読み、「西村は相場師に専念しなくて良かった。」と心底、そう思ったことだった。

柳沢保申公と出会い、開墾事業を本格的に組み入れたことで目的意識がすわったと解釈する。勿論、開墾事業は向こう先の見えない事業であり、破綻した社員もいる。八街に隣接する七栄開墾会社の島田組(八郎右衛門)や、十余三の二～三開墾会社の小野組(善助)は7(1874)年、破綻している。

「西村もいずれ破綻するだろう」と、冷ややかに見つめる社員もいたと聞く。こうした社員には、西村と保申公との約束事は知らなかっただろう。

「開墾事業で、大資産家としての名声を高めた」とする記事に得心し、また“待ちの西村”は慧眼の持ち主と納得する。

明治25(1892)年2月2日に認めた「遺訓」の一部を引く。

「(中略)開墾創業以来費ヤス処 實ニ拾有萬円ノ多額ニ達セリ。然シテ今、其所有ノ財産ヲ檢スルニ 不動産土地千五百有町歩 動産五萬円 合計實ニ貳拾余萬円ノ資産ヲ有スルニ至レリ」

堅実な実業家西村の面目躍如。明治初期の1円を今の仮に5万円と換算すれば投じた「拾有萬円ノ多額」は「約60億円」となる。また確保の「土地千五百有町歩(15万円)」も、「約75億円」とはじき出せる。浮き沈みの多い相場師とならずに良かった、保申公との約束を果たしたと安堵したに違いない。

7、西村の開墾地引き受け面積の推移

表題について、表形式をとる。

明治・年月	引き受け面積	摘要
7(1874)	707町6反2畝17歩	小金佐倉牧引請反別調書
8(1874)8	1011・2・6・03	開墾会社総会議定書
10(1877)12	1011・2・5・16	開墾会社解社之証

11(1878)	1185・7・6・06	茨城大学大槻功教授まとめ
14(1881)7	150・0・0・00	鍋島家より譲渡
25(1892)2	1500・0・0・00	自筆「遺訓」に書き込み
...
33(1900)	77・9・4・04	三咲村／西村喜野名義
33(1900)	35・8・1・04	三咲村／原 寛介名義
...
大正13(1924)	2・0・00	田-茨城大学大槻功教授調査
	470・4余	畑-茨城大学大槻功教授調査

(注)

表中、1500町(ヘクタール)には純然たる開墾地ではない土地も、含まれている。なぜなら、御宿に設けた支店(出張所とも)の関係者から小規模の田畑を得ており、発生要因は小口貸し出しの抵当か、買い取り土地と思われる。

「御宿／各村所有地明細帳」(罫紙6枚12ページもの)が残っており、茨城大学大槻功教授は調査の中で「金融業務の報告書」と位置付けている。

8、非開墾地の土地所有

開墾人西村は、前述の通り非開墾地も所有している。この分は茨城大学大槻功教授の調査から引用にとどめる。

①「御宿／各村所有地明細帳」を基にしたもの

(単位表示なし)

地区	筆数	地目	面積	地価	地租	入付米金
字浜田	3筆	田	2反6畝05歩	90,975	2,275	米2石7斗5升
	12	畑	3・7・13	33,740	844	金6円70銭
	6	宅地	3・8・07	86,686	2,168	金8円也
	9	山林	8・6・71	3,276	1,082	ナシ
	3	原野	2町2反8畝4歩	7,484	187	ナシ
字久保	4	田	2・4・23	73,161	1,829	米2石3斗
	3	畑	2・9・11	14,884	372	金2円也
	3	山林	3・6・01	1,246	030	ナシ
字須賀	7	田	3・4・25	120,641	3,016	米3石3斗5升
	4	山林	3・2・02	1,222	030	ナシ

(注)地価・地租ともに単位表示がない。西村の「遺訓」では「1500町歩/15000」だから、「1反／1円」と見ている。上表の「90,975」は「90銭」と判断できようか。

上の明細表は明治27(1894)年5月13日のまとめ。御宿支店は22年に閉鎖されており、整理時点の数値である。

②大槻教授の論文「商業的畑作農業地域における巨大地主の成立過程」中、次の報告がなされている。

非開墾地の土地所有面積(明治27年／単位・反)

	夷隅郡 御宿	香取郡 東条	香取郡 日吉	香取郡 香取	山武郡 二川	山武郡 日向	合 計
田	8,5	13,8	20,0	99,3	20,1	1,0	162,7
畑	6,1	—	—	1,2	3,5	—	10,8
宅地	1,7	—	—	—	—	—	1,7

9、重要だった有機肥料としての干鰯(ほしか)

西村が奉公にはいった油問屋丸屋(西村三郎兵衛)も、干鰯には注目し幅広くを取り扱っており、問屋仲間には元文4(1739)年に加入している。江戸の農家にとって、唯一最大の有機肥料だったに違いない。

干鰯とは、小イワシを肥料代わりに田畑に透き込むもの。

本項では西村家に残る文書中、干鰯のみを拾い上げる。

年 号	事 跡
弘 化 2(1845)	干鰯問屋仲間に参加。新設の会所蔵元に、西宮屋ともども選任される。
嘉 永 4(1851)	諸問屋名寄帳に「伊沢町・丸屋七右衛門」
安 政 6(1859)	干鰯問屋再興。西村は、記念に富岡八幡宮に石灯籠を奉納(同灯籠は現在、江東区登録文化財の指定)。
明 治 12(1879)	御宿に出張所(支店・営業所など統一されてない)を開設。近傍の漁民に採取・生産を督励。江戸の農家に販売。
明 治 14(1881)	御宿支店、カツオブシの納品書(取扱商品に多様化)
明 治 15(1882)	御宿支店、ニシンの納品書
明 治 18(1885)	御宿西村出張所より、西村本店に「御宿店計算表」を提出。この年2月から西村、八街に転居。
明 治 19(1886)	御宿・浜村支店整理支配人文書／店舗閉鎖を示したか
明 治 21(1888)	御宿中魚落郷採鮑組合事務所・西村清三郎宛て文書。 (御宿支店とは異質の組織か)
明 治 22(1889)	御宿支店大野弘次郎より西村宛て文書。 御宿西村支店式田啓次郎より大野弘次郎宛て文書。 「御宿支社建物売却につき～」大野弘次郎から西村に文書。 西村の代人大野は、前年から整理のため詰めた。

(注)文中、御宿支店の店舗名称が出張所や営業所など、不統一が目立つ。これは西村が最も嫌ったはずだった。この実情を黙認したものか、判然としない。

10、幻の「十間道路構想」

西村の代人大野は、西村宅から実住小学校前の通り「十間道路構想」が協議された時、「旧江戸市街の実情から、大商人はみな所詮「向う店」といって、道路の反対側にも店をもつならわしがあるから、将来村が発展して市街地が形成され商工業も盛んになった時、町民が「向う店」を張ろうしとして、道路が広すぎては、「向う店」が利用出来なくなってしまう。市街発展のためには、道路は4間(約7m)くらいが最もよろしい」と主張(『八街町史』参照)。

西村が安政6(1859)年、横浜開港に合わせて建設された「横浜町居住商人配置図」によれば、大通りは「道幅十間」である。西村が、新設の開墾地に横浜の大通りを構想しても不思議ではない。代人の大野は、あっさり西村の思いを潰したのである。

西村家所蔵の「御用先日記」の明治3(1870)年閏9月20日以降に、興味を引く記録がある。

「小間子道普請」が頻出する。が、いつまで続いたのかははっきりしない。どんな結果を招いたか。は、三井文庫に残る「総州印旛郡旧小間子牧 中野邨・山田邨・上砂子邨・丹尾邨・滝邨 請地分埜帳」に、測量期間の表記はないが、同文庫は明治4年のものと分類している。この「分埜帳」をもとに「明治6年新調 総州印旛郡旧小間子牧小作地割絵図面」が作成された。

そこには「御用先日記」の「小間子道普請」結果が歴然と記録されている。驚いたことに「御成街道」(俗称・おなりみち)を拡幅工事していた。

「道幅12間3尺」(総延長 1123間4尺5寸)が、その結果である。尤も、平成26(2014)年10月25日、八街市郷土資料館が「御成街道と八街」の主題で歴史講演会を開いた。

私は聞いた。

「明治3～6年時に御成街道を拡幅工事したと、西村家の「御用先日記」には記録されていますが、その痕跡は残ってるもんですか」

「いや、全く認められませんでした」と調査担当者はサラリ。

「そうでしたか。全く上っ面を削っただけの拡幅だったんでしょうから、多少でも痕跡があればと聞いてみました。残念でした」と私。

とにかく西村は、横浜で「道幅十間」の場所で肥前屋を経営した上で、御成街道を「道幅12間3尺」をある時期、保ったのだが自宅前の「十間道路構想」は代人大野の一声で消えた。残念ながら信頼関係ができてなかったことになる。

11. 1500町歩の土地は大半が鉄道投資に消えた

西村の「遺訓」に土地1500町歩は、相続人たちの目論み違いからそれらを維持できなかった。下手の相場師さながらの失策を、泉下の西村は齒がみしたに違いない。

茨城大学の大槻功教授の論稿からまたも引く。

西村家の株式投資一覧表

単位／円 単位／株

企 業	明 治 26～7	2 8	2 9	3 0	3 1	3 2	合 計
日 本 鉄 道	5,250	1,144	1,092	2,900	—	156	10,542
総 武 鉄 道	1,000	6,760	16,700	4,350	6,525	6,525	41,860
北海道炭礦鉄道	7,382	299	40,335	763	—	1,525	50,375
郵 船 会 社	—	—	3,750	7,500	3,750	—	15,000
成 田 銀 行	—	1,650	2,500	—	—	—	4,150
東 京 時 計	—	—	375	165	—	—	540
合 計	13,632	9,853	64,752	15,678	10,275	8,276	122,467

26～7年次は西村存命中の投資であり、28年1月31日に逝去しており、28年次の投資は相続人たちの行為である。主導は西村辰三。辰三は西村の母・志奈の姉・富貴(原家に嫁ぐ)のひ孫で、ひての長女ぎんに入り婿した。ぎんは2代を継いだ千秋の妹。

上表中、北海道炭礦鉄道の26～7年は、市場からの買い入れ代金。29年次は市場からの買い取り引き受け代金、39,800円を含む。上位3会社とも鉄道株が注目される。

大槻教授の解説を引く。

「28年は日清戦争の企業熱で株式市況が活況を呈した年であり、とりわけ鉄道会社の権利株の売買が盛んであった。翌29年は6月7日を頂点に、急速に金利が上昇し株式投資が沈静に向かった。西村組は炭礦株と郵政株とも最高値で買い入れはじめ、最低値で精算し結局、炭礦株で約23円、郵政株で30円の損失を受けたことになる。

そして以後、これらの株式への払い込みに追われ、32年まで新たな株式買い入れはなされていない。この後、32～8年の間、西村千秋が東武鉄道監査役に就任し、39年1750株の大株主になっている。

39年の資産調査によれば、同株は払い込み金額50円に対し、時価28円であったから、もし50円を払い込んだとすれば、合計38,500円の損失を受けたことになる。

豪商・開墾人西村の築いた莫大な資産ながら、まだ銀行借入れの抵当資産には不可能であったため、買い入れた有価証券を抵当に借入れして調達。借入利子支払いのために、新たな借入れが生ずるという悪循環に陥った。

39年には、固定債務の清算が開始された。負債が合計26万円にものほり、資産とほぼ同額に達していたため、西村家は八街村と九美上村の開墾地を除いて一切の資産を売却し、さらに残された資産も全て抵当に入ることになった。この清算の結果、負債は7万円弱に切り下げられ以後、開墾地からの地料収入のみによって返済されていくことになった。ここで、逆説的ではあるが、寄生地主に純化することになったのである。(後略)」

西村は25年2月2日、「遺訓」にしたためた。その一部を引く。

「(前略)爾来、財産ノ安固ヲ図リ永遠ニ之レヲ維持セント欲セハ 宜シク協同一致ノ法ニ依ラサル可カラス 然レトモ 一致協力亦タ最も容易ノ業ニ非ラス(中略) 宜シク厳正ナル規律ヲ制定シ 敬愛和親ヲ旨トシ 以テ協力同心ヲ誓ハシメサル可カラス 是レ 家憲ノ必要ナル所以ナリ 今ヤ家憲ヲ制定ス

汝等及ヒ子孫ハ将来ニ於テ 此 家憲ヲ遵守シ勤儉和親ヲ旨トシ協力 益々財産ヲ安固ニシ 偉業ヲ隆盛ナラシメンコトヲ 嗚呼 予ハ幸ニ今日アルヲ致ス(後略)」

株式投資は結果として、西村の言う「益々財産ヲ安固ニシ 偉業ヲ隆盛ナラシメン」ことにはならなかった。僅か7年の間に大きく逸失した。

明治22年に、誇らしく「遺訓」に書き込んだ1500町の土地が、大正13(1924)年、470町歩余にまで減るとは、全く予期してなかったに違いない。幕末から明治初期にかけ、堅実派の相場師だった西村の資産は代替わりして維持できなかったのである。「最も案じておったことを、やりおったか」と泉下で齒がみ、うめいてるに違いない。

12、柳沢牧と隣接した小間子牧と西村

西村が管轄したのは柳沢牧のすべてだが、隣接の小間子牧にも大きく関わっている。やや煩雑にすぎるため、時系列に表示する。

年 代	事 績
江戸時代	上総・下総の境界不明確。現八街市と東金市の地点。
明治3～6年	<p>開墾局が測量を指示。現東金市の滝村・丹尾村・山田村から、高台に位置する地域を現八街市に分離。滝台・丹尾台・山田台。今に至る。</p> <p>この頃、同地は政府から開墾会社に譲渡。尤も、5年5月開墾会社は解散を決議。清算まで三井組が資金を繋いだ。</p>
3年閏10月15日以降	「御用先日記」に「小間子道往来 普請ニ付 小頭共呼立申し付け候」頻出。いつまで道普請が行われたか、把握しきれていない。これは「御成街道」を拡幅工事していた。
4年9月	資金難の開墾会社は三井組から、6年12月返済を条件に2万円を借入れ。
5年11月25日	<p>「小間子牧日誌」によると、次の3人に三井組から月給が支払われている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・西村郡司(三番会社) 12両2分ツツ 申年分 ・大久保弥七郎(二番会社) 6両ツツ 右 同断 ・福田半兵衛(十倉会社) 6両ツツ 右 同断
6年6～12月調整	<p>「総州印旛郡旧小間子牧小作地割絵図面」</p> <p>同図に御成街道跡は「道幅12間3尺」「総延長1123間4尺5寸」と書き込まれている。</p> <p>この測量明細は「総州印旛郡旧小間子牧中野邨・山田邨・上砂子邨・丹尾邨・滝邨 請地分埜帳」に仕上げられ、これを元に「小作地割絵図面」が調整された。</p>
7年2月	<p>元開墾会社は、三井組からの借入れ返済のため同地を入札。応札は三井組だけのため、三井組に落札。利息分の2700円を免除、17,300円で落札。</p> <p>土地1731町8反1歩と、馬およそ600頭を含む。</p>
7年9月29日	<p>三井組の金庫番・三野村利左衛門(西村店に19～25歳まで奉公)から、「2万円以上で売れたら、それ以上は斡旋料として支払う」とする文書が残る。</p> <p>西村は横浜の大肥前屋(ひて夫婦が経営)を通じ、鍋島家に連絡してもらう。</p>

8年3月31日	鍋島家の金庫番・深川亮蔵と三野村利左衛門は、三井組が元開墾会社から引き受けた現況のまま、2万円で売却。 西村に、幹旋料は発生しなかった。
9～14年	滝台の三井組名義の一部を、大隈重信侯に名義変更。 その経緯は『千葉県歴史 100話』(川名登編著)から引く。 「三井八郎衛門が9年、地券書換訴訟を小作民側から起こされた時、開墾事業の功労者・三井を法廷に立てるわけにはいかない(中略)、裁判所や県当局役人が談合を重ね、三井の土地は大隈重信や青木周蔵に名義変更した」 ここに、西村が一枚加わってなかったか関心は尽きない。
10年以降	この頃から、入植者が入りはじめる。柳沢牧の大字「い～ほ」に続く、大字「へ」が設定され今に至る。
14年7月21日	西村は鍋島家から、150町歩(今の笹引地区)を譲渡される。2万円で、1731町余の土地を買い受けたことへの紹介謝礼の意味があったもの、と私は解釈する。
14年8月12日	佐賀県から大隈重信名義の土地に、下村有充一家が入植した。大隈は、鍋島家の管理人毛利元圀に管理させ「大隈事務所」として使った。 下村家については次の項目に譲る。

13、小間子牧の下村家「珮犢園」



上の図柄は、『日本博覧図 千葉県部』に収録されている。私は現物の銅版を下村勇氏(当時)から生前中、「八街市郷土資料館に他の文書ともども、整理して寄贈してほしい」と頼まれ、そのように事を運んだ。

図柄の正面右側は「以前、大隈重信侯の事務所に使われ、一度も改築してません。大隈侯が何故、ここに事務所を構えたか詳しいことは知らされてませんが、当地から大隈家に養子に入った人がおりました。若くして亡くなり、今はすっかり縁が切れてます。」

下村家は「珮犢園」を名乗り、肥料販売や養蚕と畑作を幅広く経営した。

西村没後15年の明治43年、下村善胤(当時)は西村千秋を訴えた。小作料や役場の公金問題をからめての訴訟である。裁判資料に『志士之涙痕 八街紛擾史料』(石田浜吉編)を印刷。あちこちに配布した。

勇氏は「父(経雄)から50部を作ったそうだと聞かされている。その1冊が芥川龍之介の手にわたり、芥川自身が八街を訪ねたのが大正13(1924)年2月22日のことである。

同書に、石田は西村家を次のように書き込んだ。

「総武線上八街駅を過ぐる者は、何人も其眼眸に多少の印象を留むるならん。停車場に面し四面街衢に限られ、繞らすに数尺の土堤と外濠を以てし、白亜粉壁巍然たる大厦の王侯を凌ぐものあるは、是れぞ土地の富豪西村某の邸宅にして、縣下に轟く八街紛擾の淵源とこう知られたり(後略)」

あいにく、西村家は明治3年7月に竣工した三番会社の事務所である。そのまま今も使用しており、下村家と比較するものは無いに等しい。大正時代までは土手の内側に土蔵はじめ物置・農具小屋・牛小屋・鶏小屋・炭焼のかまどなどが配置されており、いたってシンプルである。

芥川も折角たずねながら、裁判史料の書き込み内容との落差が大き過ぎ、執筆の手が鈍ったことであろう。作品中、西村は奥村喜右衛門の名で描かれた。

作品の末尾は「他の郵便物へ目を通した後、何気なしに帯封を切って見ると、意外にも東京の新聞だった。のみならず名前さへ聞いたこともない『黎明新聞』と云ふ新聞だった。彼は老眼鏡」で終わっている。

『黎明新聞』と今、西村家が経営する学校法人千葉黎明学園の関連を、私は確認したことはない。

下村家は一時期、八街村長を務めた。が勇氏が亡くなり、「珮犢園」の跡形もなく、今は平坦地が広がるだけである。

なお、『日本博覧図 千葉県』では413カ所も収録されている。「珮犢園」(21年版)はじめ、現八街市では富山区にあった「佐倉同協社」(19年版)が収録されている。開墾地三咲村を代理した西村喜野・原 寛介夫婦は、寛介名義で「静楽園」(27年版)を載せた。多分に集合広告の意味合いがあり、西村が応ずる内容ではない。尤も、2代千秋夫人の生家、「長生村 農 医学士 千葉弥一郎邸宅」も応じている。

大隈重信侯はかつて「髭は人を威圧する」と公言。髭は伸ばさなかった。私はこれは西村の薫陶と踏む。かつて横浜の大肥前屋に出入りし大隈は、伊藤博文・大木喬任(のち都知事)らとともに食客に連なった。前記の集合広告に載せないのも、一種の信念だったのではないか。

14. 西村の卓越した慧眼の背景を探る

相場師・豪商・開墾人。そのいずれにも巨大な足跡を残した西村を、誰もが納得する評価はすこぶる難しい。無駄をはぶき、徹底した生き方を追求した姿が見えて、生き方そのものが清々しい。

19歳で油屋ご用達・丸屋三郎兵衛に奉公に上がる時「商いで身を立てる」と志を固め、父親の「農業を継がせる」意図を曲げて、商人の世界に入った。西村の生き方は、それをそのまま突っ走った感がある。しかも取り扱い品目(営業種目)が多様化し、肩書が増え、心底からの休息はないに等しい人生だった、と思われる。

本稿の狙いは「開墾人・西村」である。なぜ、江戸の豪商が国内随一の開墾人となり得たか。冒頭、触れたように柳沢保申公との出会いがあり、柳沢牧を管轄する御縁があったからに尽きる。柳沢公との縁が深まり、西村の研ぎ澄まされた合理的慧眼が時代を見通した、と見なされる。

なぜ、合理的慧眼と評価できるかは次の諸点に含まれる。

①第一、商人は利益の出ない仕事はしない。投下資本をカバーして余りある数値を残すことに尽きる。西村は、元手を下回る結果を残していない。

②長い視点にたつ利益目標を掲げて“活動”してきた。不幸にも火災のために何度か資産を失ったが、その都度、立ち直ってきた。

・弘化2(1845)年12月28日、家屋・倉庫のすべてを焼失。

・安政2(1855)年10月2日、大地震のため倉庫6棟など倒壊。

・文久3(1863)年、横浜大火。「大肥前屋」類焼。

③一時期、相場師として行動したが深入りしなかった。「相場を張り続けていると、資産をすってしまうので事業に投資する」と、視点を据えている。

④西村自身が、開墾地を“柳沢牧跡に選んだ”と私は踏む。

・慶応4(1868)年、次女ひてに塩沢七兵衛を婿養子に迎える。その折、柳沢公から“打ち掛け一式”を結婚祝いにもらう。現品は、ひての末裔(千葉市稲毛区)の蔵に今なお、眠り続けている。ひての孫・寿満(現104歳)さんは記憶が正しかった頃、「柳沢様からの豪華な打ち掛けは家宝だから」と娘・靖子さん(前千葉みなと病院理事長。現在、長女佐和子さん内科医に委譲)に語っている。

・明治2(1869)年4月22日、ひて夫婦に長男金太郎誕生(15歳の時西村家に入り、のち千秋と改名。7年後、西村家2代を継ぐ)

・明治政府は同年5月、開墾局を開く。江戸幕府の失業した旧武士たちのための授産事業である。対象地は、千葉野(旧小金牧・佐倉牧)。佐倉牧内に“柳沢牧跡”が含まれていることを知り、西村は反射的に管轄を希望したに違いない。

そう信ずる。

・結果として西村が「遺訓」に書き込んだように、土地1500町歩(ヘクタール)を所有する“大開墾家”となった。当たり外れの無い、合理的慧眼の結果がもたらしたものといえる。

15. 計算づくの人生だったかも知れない ―結びにかえて

西村の業績を追うたびに、「対象としては大き過ぎる」とため息をつく。八街郷土史研究会では、平成25(2013)年、西村生誕200年記念「史料で見る 西村郡司翁小伝」をまとめて以降、27年「西村没後120年記念 史料主体 西村郡司翁伝」、令和元年「史料主体 西村郡司翁伝(改訂版)」、令和2年「西村没後125年記念 西村郡司翁伝 新版」。令和3年、組織を解散し八街開墾資料舎に改め、資産を引き継ぐ。同年「八街の開祖 西村郡司翁伝」を発行して、西村翁の業績を拾い集めてきた。あくまでも資史料主体である。

資史料には現れないが、西村の影がみえる場面がいくつかある。

①明治2年5月、開墾局が発足時に「開墾地名前を早く決めるように」と催促したのは誰か。

三井八郎右衛門や西村七右衛門(明治4年元旦から郡司と改名)らが開墾会社の総取締・総取締並として君臨。政府の手薄な職員(北島時之助が主体)を督励し続けている。同年8月15日、北島が大木喬任府知事に宛てた手紙の中で“地名案”を記載。そのまま認められた。

②八街の現滝台にかつてあった大隈重信名義の土地についても、前述のように「(三井を法廷に立てることを防がねばと)裁判所や県当局の役人と対策のため談合をしており」に、文面には西村の姿が見えない。私はあくまでも推測の領域に属するが案外、西村から提案があったのではないか。対象地は三井組が管轄した旧小間子牧の一角であり、かつて西村ら3人が三井組から月給を貰って管理した。西村自身、「三井組の代表者を法廷に立てるわけにはいかない」と暗躍するのも故なしとしない。

③大隈重信侯は生涯、髭を伸ばさなかった。「髭は人を威圧する」が信条だった。西村も伸ばしていない。前述したように、大隈侯は若い頃、西村の大肥前屋の食客だった。干支2まわり下の大隈は生涯、西村に心酔し八街にもたびたび訪れている。私は「髭は人を威圧する」の思考は、西村仕込みと思っている。尤も大隈自身、生まれながらの悪筆を理由に筆跡を残していないから、真偽のほどは分からない。が、西村の影が見えて愉快である。

その大隈侯が西村家を訪ねるたびに、「長刀を西村家の乳母(梅室さき)に預けて西村と語りあった」と以前、寿満さんは靖子さんに語っている。

記録が残ってない分、“聞いた話”を書き留めておく必要性をしきりに感じている。西村を、大きく評価した人に坪谷善四郎(1862～1949)がいる。大著『實業家百傑傳』(全6巻)の第5巻に西村を紹介。西村没後、1周忌に漢詩を届けている。その大要は「祖先を大事にし寺社を守り、武士にあらず農家にあらず、一家を構え富家富国のため開拓に尽くし、繁華を見て永眠した」と読める。

かの漢詩の現物は、西村本家から八街市郷土資料館に移管されている。

坪谷善四郎は昭和20年9月、千葉市稲毛区に転居。5年後に逝去。西村関連が“稲毛区”に縁があり、限りなく嬉しい。稲毛区住まいの靖子さんから「母にもしものことがあり、蔵を整理せねばならないときは高橋さん、一度きてみてください」とお電話を受けたのは一昨年のことだ。

寿満さんは今104歳。私は令和3～4年、年をまたいで急性肺炎のため入院した。人生ままならない日々を過ごしており、今回の西村翁を記録するも支離滅裂の感を否めない。

(敬愛大学特別研究員)

補記 寿満さんは令和4年8月4日、逝去されました。

参 考 文 献

1、コピー資料の題目のみを列記する。

①公益財団法人三井文庫

・柳澤牧庵繪圖

・小金佐倉牧引請反別調書

- ・開墾会社総会議定書
- ・開墾会社解社之証
- ・総州印旛郡旧小間子牧 中野邨 山田邨 上砂子邨 丹尾邨 滝邨 請地分埜帳
- ・明治6年新調 総州印旛郡旧小間子牧小作地割絵図面

②公益財団法人郡山城跡・柳沢文庫保存会

- ・柳沢吉保時代の上総下総料地抜粋

③致航山満願寺

- ・細井広沢作成実測図／柳沢牧・小間子牧

④読売新聞

- ・明治36年6月17～19日

「相場師社会-大手の売買振り・相場師の人物論」

⑤日本経済新聞／電子版

令和2年5月2日

「相場師西村の信条」を紹介

2、現物およびコピー

①西村本家所蔵

- ・「御用先日記」「小間子牧取扱日誌」各種資料多数
- ・坪谷善四郎著「實業家百傑博」(西村収録分)コピー
- ・坪谷善四郎漢詩現物

②下村家所蔵

- ・「珮犢園」銅版現物
- ・裁判資料「志士之涙痕 八街紛擾史料」(石田浜吉編)現物
- ・下村家関連資料現物

③八街郷土史研究会および八街開墾資料舎の刊行物

- ・「西村生誕200年記念 史料で見る 西村郡司翁小伝」
- ・「西村没後120年記念 史料主体 西村郡司翁伝」
- ・「西村没後120年記念 史料主体 西村郡司翁伝 改訂版」
- ・「西村没後125年記念 西村郡司翁伝 新版」
- ・「八街の開祖 西村郡司翁伝」

各誌収録の資料、写真については、引用した本稿では出典先を省略。

④茨城大学大槻功教授の論稿

・「商業的畑作農業地域における巨大地主の成立過程」(西村本家所蔵の資料に含む)が、本稿に多くを引用したため掲げる。

⑤川名登編著『千葉県の歴史 100話』(国書刊行会)

⑥『八街町史』